

## ☛ 「つまづく」とは？

「目」や「手」があなたを「つまづかせる」?!

前回、「色情をもって女を見る者は …」の意味を考えましたが、そのあとに続く文にも追い打ちをかけるように、どう受けとったらいいのかわからない箇所がありませんでしたか？

.....

29 もし、右の目があなたをつまづかせるなら、えぐり出して捨ててしまいなさい。体の一部がなくなっても、全身が地獄に投げ込まれない方がましである。30 もし、右の手があなたをつまづかせるなら、切り取って捨ててしまいなさい。体の一部がなくなっても、全身が地獄に落ちない方がましである。(『新共同訳』)

.....

右の目が、そして右の手が、あなたを『つまづかせる』— とは、いったいどういうことなのでしょう。若き日のわたしは、最初これを「見てはいけないもの、たとえば、ダビデのように入浴中の女性をのぞき見るとか、そこまではいかなくても、当時若い男性に人気があった週刊誌『平凡パンチ』や『プレイボーイ』に載っているビキニ姿(当時はその程度の露出度でした!)の女性の写真を見て、「『みだらな思い』を抱くことが、つまづくってことかな …。それにしても、『目をえぐり出して捨てなさい』とは、イエスさまも酷なことをおっしゃる …」と思っていました(お恥ずかしいというか、幼かったというか …)。私たちが「つまづく」という言葉を使うのは、たとえば足が道端の石ころに当たって倒れる(よろける)とか、小指を立てて「私はこれで会社をクビになりました」という、ひと昔前の禁煙用具のコマーシャルの男性のように、ある出来事で人生を台無しにするような「失敗」をした時です。それがなんと、自分の「目」や「手」につまづくのですから、戸惑ってしまいます。ここでまた、『辞書』を引いてみましょう。山浦先生ご愛用の『新明解国語辞典』には次のような記述があります。

つまづく【躓く】〔爪<sup>ツメ</sup>突く意〕⊖ 〈な<sup>ニ</sup>に二〉 歩く時、足が物に当た(ってよろける)。「敷居に—」  
 ⊖ 〈な<sup>ニ</sup>に<sup>デ</sup>一〉 途中で障害にあって失敗する。「スタート早々に—/ 人事問題で—」

## 「イエス」につまづく!?

この「つまづく」という言葉は、聖書の中にたびたび登場します。手元にある『新共同訳 コンコルダンス』(「コンコルダンス」とは「聖書語句辞典」という意味)で、「つまづく」の項を引くと、新旧約聖書合わせて「23」の例が出てきます。この本の冒頭に「信徒向きの簡易な聖書語句引用」とありますので、1冊3万円以上(!)もする百科事典のような分厚い同種の辞典を引けばもっと多いかもしれません。いくつかご紹介しましょう。

『わたしにつまづかない人はさいわいである。』(『マタイ』11章6節)

『人々はイエスにつまづいた。』(同上、13章57節)

『今夜、あなたがたは皆わたしにつまづく。』(同上、26章31節)

『みんながあなたにつまづいても、』(同上、26章33節)

『人々はイエスにつまづいた。』(『マルコ』6章3節)

『あなたがたは皆わたしにつまずく。』(同上、14章27節)

『わたしにつまずかない人は幸いである。』(『ルカ』7章23節)

『あなたがたはこのことにつまずくのか』(『ヨハネ』6章61節)

特に『マタイ』では「つまずく」や「～をつまずかせる」という表現が、ほかの三人の福音記者より多いようです。八つの例文はどれも、「つまずく」の前に「～に」とあるので、『新明解』の㊦の用法に当たります。この用法を頭において『マタイ』13章57節の『人々はイエスにつまずいた』という文だけを考えると、おかしな光景が思い浮かびます。ある人が道を歩いていたら、イエスが酒に酔ったのか路上に横になって眠っていたとします。イエスは『見ろ、大食漢で大酒飲みだ。』(『ルカ』7章34節)と、一部の民衆に言われていたほどでしたから、想像できなくはありません。その道を歩いていた数人がイエスに気づかず、つまずいて転んだ — ということになります。

この「つまずく」が出てくる『マタイ』13章の前後の箇所を読んでみましょう。

『イエスは(中略) 54 故郷にお帰りになった。会堂で教えておられると、人々は驚いて言った。「この人は、このような知恵と奇跡を行う力をどこから得たのだろう。55 この人は大工の息子ではないか。母親はマリアと言い、兄弟はヤコブ、ヨセフ、シモン、ユダではないか。56 姉妹たちは皆、我々と一緒に住んでいるではないか。この人はこんなことをすべて、いったいどこから得たのだろう。57 このように、人々はイエスにつまずいた。イエスは、「預言者が敬われ<sup>うやまつ</sup>ないのは、その故郷、家族の間だけである。」と言い、58 人々が不信仰だったので、そこではあまり奇跡をなさらなかった。」

イエスがふるさとに帰って会堂で教えていたとき、人々は彼の幼いころを知っていたので「な～んだ、あいつはイエスじゃないか。大工のヨセフのせがれで、かあちゃんはマリア、兄弟姉妹は誰々で…」と口々に言い出しました。同時に「それにしても、あのイエスがこんな深い知恵をもち、奇跡をおこすなんて…」と驚き、それを信じられず、彼に「つまずいた」というわけです。イエスの体のどこかに当たって、よろけたわけではありません。

### 「スカンダリゾー」の訳は

この「つまずく」のギリシャ語は「スカンダリゾー」という動詞を訳したものです。この言葉には次のような意味があるそうです。

スカンダリゾー ①罪(不信仰、背教)に誘う。②不快にする、憤慨させる、怒らせる。

幼いころのイエスを知っている人たちが、「あいつにそんなことができるわけがないよ!」、「見てみろ、俺たちの前では奇蹟なんて起こせないじゃないか!」と腹を立て、バカにした — と読み取ることができます。さらに、イエスに「預言者が敬われ<sup>うやまつ</sup>ないのは、その故郷や家族の間だけだよ」と言われ、自分たちの不信仰を指摘された人たちが怒って「お前の言うことなんか信じるもんか!」と、イエスから離れていった — というわけです。この箇所を山浦訳聖書は、次のように訳します。

『54 故郷<sup>ふるさと</sup>の村に帰って、<sup>よりあい</sup>寄合で村の人たちに教えていなさったが、村の衆はこれを見て、魂<sup>たまげ</sup>消てこんなことを言ったものでござる。「此奴は、大した道理<sup>こいづア てア どうりア</sup>がわがって、人の業<sup>わざ</sup>ども思われねアような<sup>すこ</sup>凄<sup>ゴトオ</sup>い事をする力<sup>ちから</sup>があるづう(あるという)話だが、何処でそんなな(そんな)事<sup>ゴトオ</sup>を身に付けだもんだれ? 55 そもそも此奴は<sup>こいづア てア</sup>大工の子<sup>こせがれ</sup> 倅<sup>ア</sup>ではねアが? お袋<sup>ふくろ</sup>の名はマリアで、弟<sup>しやア</sup>等はヤコブと、ヨセフと、シモンと、ユダではねアが? 56 妹<sup>いもうと</sup>等<sup>ア</sup>だってみんな俺<sup>おら</sup>等と一緒にこの村で暮<sup>あ</sup>してつツエア(暮して

いるぜ！ それなのによ、<sup>なん</sup>何でまだ此奴はそんなな<sup>だい</sup>大それだ<sup>ゴドオ</sup>事を身に付けだつうんだれ(身につけたというんだ)？ 57 こんな有り様で、人はみなイエシューさまを小馬鹿にして、まるで相手にもしなかったものでござる。それで、イエシューさまはその者たちに言いなさった。「やれやれ、他所でアいざ知らず、故郷ど家の者等の間でア、御言持ち[預言者]も形なした！」 58 こんな塩梅で、一向誰も本気で心を寄せようとも信用しようともしなかったから、そこでは、人の業とも思われぬ、あのさまさまのすばらしい力を見せるようなことは何もなさらなかった。』

新共同訳では『人々はイエスにつまずいた』と訳された箇所は、山浦訳では『人はみなイエシューさまを小馬鹿にして、まるで相手にもしなかった』となっています。どちらがスッと心に入ってくるかは、言わずもがなですネ！

冒頭の『右の目があなたをつまずかせるなら、…』の山浦訳は次のようになります。

『それ、右の目がお前さんを人の道に外れさせているぞ。そんなら、そんな目玉はグリッと抉ってしまえ。それ、右の手がお前さんを人の道に外れさせているぞ。そんなら、そんな手などはバツサリと切って棄てろ』。「人の道を外れさせる」＝「人間として当然あるべき姿・在り方から逸らせる、外れさせる」ような目や手なら、切って棄てろ — と、イエスは言っているのです。

### イエスに兄弟姉妹たちはいた？

「イエスには兄弟姉妹がいたの？」と思った方がいらっしゃると思います。これについては、カトリック教会とプロテスタント教会の教えはまったく異なっています。

プロテスタント教会には、①「信仰のみ」：人が神の前に義とされるのは、善行の業績や儀式によるのではなく、神に対する心からの信頼としての信仰による。②「聖書のみ」：信仰生活の究極的な拠り所は、聖書の啓示のみである。③「万人祭司」：洗礼を受けた信者はすべて祭司である — という〈プロテスタンティズムの三大原理〉があります。それゆえ、②の考え方から聖書に書いてある通り、マリアには「息子四人・娘二人以上」がいた — とします。

一方、カトリック教会はマリアの「永遠の処女性」の教義からしてイエス以外の子をマリアに認めえず、弟妹たちも「いとこ」たちと解釈します。マリアに関してプロテスタント教会は、イエスが彼女から生まれたという事実は認めますが、それ以上のことは認めません。「それ以上のこと」とは、カトリック教会のマリアについての教え、たとえば、①諸聖人(プロテスタントは「聖人」は認めません)の中で最も優れているかたは、聖マリアである。②マリアは原罪を免れ(「無原罪の御宿り」：マリアが母親の胎内に宿ったとき、すでに原罪の汚れから守られていたとする)、原罪の結果である死の腐敗も免れ、地上での生活を終えたのちは靈魂も体も天国に上げられた(「被昇天」)。③マリアはイエスの意志と恵みによってすべての信者の霊的な母(「神の母」)にされた — などが挙げられます。この教義に関しては、さらに詳しい説明を後日書きたいと思います。また、両教会の教義におけるその他の違いについては、今後の話題の中で適宜お話しできたらと考えています。

毎日の生活の中で、さまざまな誘惑が私たちに襲います。神さま、私たちがそれに惑わされず、御旨にしたがって歩むことができますように。

### 【引用・参考にした書籍】

- ・山浦玄嗣 『ガリラヤのイエシュー』、『イチジクの木の下で』(上巻)
- ・ホセ・ヨンバルト 『カトリックとプロテスタント どのように違うか』(サンパウロ、1999)
- ・大貫 隆 他 『岩波 キリスト教辞典』 ・金田一京助 他 『新明解国語辞典 第7版』
- ・秋山憲兄 監修 『新共同訳聖書 コンコルダンス』(新教出版社、2008) ・新共同訳『聖書』